

社 会 科

大 隅 一 浩
関 東 朋 之
多 田 渉

I 研究主題と社会科

1. 研究主題のとらえ方—教科の「目指す生徒像」

社会科では、研究主題及び2年次の実践を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、3年次の実践に取り組んできた。

【社会科の目指す生徒像】

社会的事象を多角的に捉え、民主主義を尊重し、
よりよい社会を求めて、公正に意思決定できる生徒

前研究において、さらに進行していく人口減少やグローバル化を見据え、今後、社会を形成していくうえで必要と考えられる資質・能力の育成に努めてきた。本研究では、引き続きそれらの資質・能力の育成に努めていくにあたり、特に社会集団における意思決定に重点を置いていきたいと考える。意思決定とは、たとえば投票行動の場面などを想定している。数年後、生徒たちは確実に有権者となる。その際、社会的事象を多角的に捉え、民主主義を尊重して、公正に物事を判断していこうとする態度は、考え方の異なる他者によりよい社会を形成していくうえで、特に必要な資質・能力であると考え。

こうした問題意識の基、「多角的な見方」「民主主義」「公正」を、教科において重視する見方・考え方として掲げ、アメリカの社会科研究者エングルとオチョアが示した民主主義を担う市民に必要な意思決定スキル（奈須正裕・江間史明 2015『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』）を教科で育てる資質・能力と捉え、目指す生徒像に近付けていきたいと考える。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視している 資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを 求める探究心や 自主性、社会性	・扱う問題に対する見方が自分と異なる人々の 意見に共感できる。	・論争的な課題を扱い、様々な立場から多角的に 問題を考える場面を設ける。 ・ディベートを行い、異なる意見を出し合う場を 設定する。
知識や技能、経験 の生かし所を見 いだす力	・ある問題の大きさをはかり、対立するポイン トや論争点を認定できる。 ・提案された解決策のいずれに対しても、起こ りそうな帰結に至るまでのシナリオを構築で きる。	・根拠と理由付けを明確にして意見をつくったり、 他の意見の根拠と理由付けを批判的に見直した りする場面を設ける。 ・時間軸、空間軸、社会軸から問題を捉え、既習 事項を踏まえて、問題の帰結を予想させる。
場に応じて判断 基準をつくる力	・問題に関連する情報を選び出し、提案された 解決策と論理的に結び付けることができる。 それらの情報の信頼性を判定できる。 ・証拠や判断の基準となる価値に対立が生じ た場合、合理的な判定ができる。	・社会科の中で汎用的に使うことのできる概念的 知識を整理し、年間指導計画に位置付ける。 ・判断基準を明示したり、判断基準を意識化させ る問いを発したりして、活用させる。
学びを評価し、課 題を見付ける力	・その問題を可能な限り（価値を含む）広い文 脈において見るができる。	・学んだことが概念的知識にまで高まるように、 教師が生徒の発言や振り返りを評価する。

2. 研究のあゆみ

社会科では、前研究において、情報や考えを批判的に見直す力や、判断基準を意識的に設定し公正に意思決定や合意形成を行う力の育成については課題が残った。そこで本研究では、論争的な課題の解決に向けて意思決定や合意形成を行う際、社会的事象を多角的に捉えるための資料提示や課題設定の工夫、それぞれの考えの根拠と理由付けを批判的に見直す場面の設定や民主的な視点に基づいて公正に価値判断を行う場面の設定の工夫を重視して、研究に取り組んでいく。

1、2年次研究から、社会的事象を多角的に捉えること、根拠や理由付けを示して結論を述べること、意見の異なる他者と交流することの必要性や重要性を実感する生徒が増えてきた。3年次は、さらに社会科の目指す生徒像に迫るために、より民主主義を尊重し、公正な意思決定につながる手立ての工夫に努めていく。これまでの実践では、特に社会科で育てる資質・能力のうち「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付けることができる」力や「それらの情報の信頼性を判定できる」力、「提案された解決策のいずれに対しても、起こりそうな帰結に至るまでのシナリオを構築」する力、「その問題を可能な限り（価値を含む）広い文脈において見ることができる」力の育成に重点を置いて研究を進めてきた。

具体的には、資料をクリティカルに読み取り、自分と異なる解釈をしている他者との対話を通して情報の信頼性を判定する授業や、これから目指す社会（帰結）を設定し、よりよい財政政策を可能な限り広い文脈において見渡し対話や発表を通して多角的に考察する授業を行った。各授業では、教科で育てる資質・能力が発揮されたかを生徒に自覚させるため、振り返りの場面における指導言の工夫を行った。

今後も、資料を批判的に読み取る場面や、立場を変えて自分の考えを再検討したり客観的な立場から判断を下したりする場面を繰り返し設定し、教科で育てる資質・能力の向上を図っていきたい。また、これまでの実践から見えてきた概念的知識を他の場面でも意識的に活用できるように、年間指導計画に反映させていきたい。

3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 三角ロジック（トゥールミン・モデル）を繰り返し活用することで、根拠と理由付けを使い分けて論理的な考えを述べられるようになってきている。第3学年の授業では、他者の考えに根拠と理由付けがあるかどうかを見極め、指摘する場面も見られた。根拠と理由付けを分けて比較し合うことで、問題点や対立のポイントが見えるようになり、自分の考えを修正・補強するために資料を読み返す姿や新たな資料を探し求める姿につながると考えられる。
- 生徒の既習内容や資質・能力を丁寧に把握し、教師が提示する情報や発問、学習活動に反映させることで、概念的知識の獲得に至る生徒が多く見られた。本時の授業でどのような資質・能力を身に付けさせたいのかを具体的な姿として設定し、生徒の姿を基にした評価ができるようにしていきたい。
- 時間軸、空間軸、社会軸から社会的事象を捉えさせるうえで、歴史学者や政治家などの専門家の立場に立って追究する活動は有効であると考えられる。また、実際に専門家の意見を聞いたり、自分たちの考えを専門家に評価してもらったりすることで、より公正な結論に至ることができる。今後も社会科の見方・考え方を意識的に働かせる学習活動の工夫に努めていきたい。
- ▲生徒の振り返りの様子や記述内容から、資質・能力の発揮を自覚する姿が見られるようになってきているが、一方で学習内容の理解に留まっている生徒も多く見られた。学習内容ではなく資質・能力を基にして評価を行う工夫や、資質・能力の発揮に気付かせるコメントの返し方の工夫が必要である。
- ▲ある単元で身に付けた概念的知識や資質・能力を、他の単元や生活場面に転移させ自覚的に発揮させることについては課題が残った。今後は、概念的知識や資質・能力を基にした年間指導計画の作成に取り組んでいきたい。